前號の誌上、『地質探檢の結果』の末尾に、左記の二行を誤脱せり。謹みて粗漏の罪を謝す。（編輯委員識）

又同三月中一週間七床（第一號より第七號に至る）に於て精煉したる生銅は三萬五千二百八十貫目にして產銅二千五百廿六貫八百六十目なり

文苑

永泉寺芍藥見ち記

助教授　稼堂陳人

三十一品の奇芬、白々朱々、花の市をなし、二十四橋の明月、風々雨々、錦の衣を翻へすなと、いひけむは、唐土の人の芍藥を稱へし言なりけり、そも、男女のなまめきたる、かたゝにたはぶるときなと、此の花を折りて贈るとか、その國の古への詩にも見えて、其の品たる、もと高きものにもあらすやありけむ、こゝの昔の歌にも、見えたりとも、覺えされとも、さすがに、物はその作なしによりて、高きはいよ〳〵高く、卑きもれのづから高く見ゆるものにしあれは、芍藥も、二十四橋の明月に、三十一品の色香を匂はするも、ひたすら、人の力を加ふれはなるへし、茲に去らぬ火の道のしりなる隈本に、永泉寺といふ寺あり、寺の上人、芍藥を好みて、年ごとにうゑ作れり、その品、三十余種あり、ことし、卯月のそれの日、友とする人、ひとりふたりして、見にゆきけり、あたかも、花盛にて、白々紅々、その色香の妙なる、高々低々、その容姿のわざとならぬ、珠の杯

を傾くるやうなるもあれは、銀の椀を擎ぐるやうなるもあり、あるは、大和錦をれりなせるもの、あるは、韓紅をさらせる、そのなかには、黛をひき、粉をよそひ、面はづかしげなるも、まじれゝど、そのたけ、いやしからす、わづか、數畝の間なれど、遠さかりて、ながめやれば、煙をふくみ、霞をこめたらんやうなる、夕陽にかゝやき、輕風にひるかへり、いづれ劣らぬ、花かづらの、緣のきぬのうれに、匂ひあへる、空も花に醉へりとは、かうやうの花をや、いふへからん、からの人の、花王に亞ぐものよといひけむも、この花をみざるがしひごとならし、とぞ思ひあはさるゝばかりなり、花すでに、奇品といふ奇品を、あつめて、年久しく作れは、その名、世に喧しく、人の見にくる、つかの間も、絶えされど、清淨のさらひにしあれば、れのづから、さわがしくもあらす、品高くして、近づきがたらめれは、えせ歌かきて、ゆひつくるものもなし、殊に、上人のこゝろしらひのゆかしき、花壇の外は、いよすもて、垣ゆひめぐらし、上には、ひさしかけて、けぢからぬはとに、ひとあしの椅子をれけるのみなり、門をいづれば、巷のちり、目にこてども、庭にいれは、夏木立ものふりて、鳥の鳴音、一聲二聲きこゆるのミにて、僧はミねず、はしねに、見ん人のためにもとてや、炎れけをすゑたる、かたへに、名もしらぬ、一はちの花の、露けく咲きこぼれたる、いとつきゝし、内をみいれは、月裏天香といふがく見ゆ、僧五岳のかけるにて、世にふれたるものにも似ず、床に澤庵和尚が一軸をかけたる、風吹きて動かす、天邊の月、雪壓ひて摧けす、澗底の松、の一聯をかけり、その高く雅かなる、三十餘品の花に、一段の匂ひを添へ、二十四橋の水に、半輪の月を寫したる、こゝち

す、といはんも、よのつねなり、

松風のはゝきにちりをはらはせてにほふみてらの花のしやくやく

海上月　　稼堂

つくしぢの雲はれわたるさゝらがた今かさすらんさゝらえをとこ

狩野季信の畫をフアーデル氏ととやろくさだしける

よしあしのこゝろはたなし難波江の西と東のかたかはるとも

新竹

生さきの恐るへきかなぬきいづる一夜見ぬまの窓のくれ竹

謠曲の夜打曾我

一筋のこゝろはなぞかたゆむべきちすぢの繩の身にかゝるとも

この頃、歌三つ咏みて、題名を、求めたれど、

得ねば其まゝにす　　溪川學人

あら熊の越ゆる小木曾の山中に我住みなんかたゞひとりして

を歌みたにせさりし夜への雨は晴れて有明の月に鴈なきわたる

大丈夫かきのふ狩りせし山のへにひとむら雲のたなひきにけり

社頭五月雨　　松露生